

き
み
だ
け
に
光
か
が
や
く
暗
黒
星

美少年探偵団

西尾維新

NISIOISIN

十年前に一度だけ見た星を探す少女——私立^{ゆびわ}指輪学園中等部二年の^{どうじま}瞳島^み眉美。彼女の探し物は、学園のトラブルを非公式非公開非営利に解決すると噂される謎の集団「美少年探偵団」が請け負うことに。個性が豊かな五人の「美少年」に翻弄される、賑やかで危険な日々が幕を開ける。青春ミステリーの新機軸！

美少年探偵団団則

- 1、美しくあること
- 2、少年であること
- 3、探偵であること

0 まえがき

きみの意見には反対だが、しかしきみが意見を述べる権利は死んでも守る——フランスの思想家、ヴォルテールの言葉だが、さすがは歴史に名を残す巨人である、思えばこれほど非の打ちどころのない、意見の潰しかたも珍しい。

はつきりと反対を表明した上で、意見を戦わせることは一切しない、議論のテーブルにつくつもりはまったくないと宣言するのだから、生かさず殺さずとはまさにこのこと。

『怒ってないから』と言って謝らせてくれない、クラスの優等生を想起させる。

わたしの意見も、そんな風に潰された。

否、意見ではなく、あれは夢と言うべきか。

だからこれは、わたし、瞳島眉美が夢を諦めるまでの物語だ。幼少期からほのかに、だげど心強く抱いていた『大きくなったら』を、中学二年生に至ってすっぱり後腐れなく諦めると言えばありふれた出来事だし、そんなしみつたれた話は聞きたくないかもしれないけれど、しかし、あの少年ならば——あの美少年ならば、きつとこう言うのだろう。

「夢を追うことは美しい。だが、夢を諦めることも、また同様に美しい」
ただし、自ら諦めた場合に限るがね。

まったくあの美少年、言うことだけは格好いいのだ。
果たして——わたしはどうだっただろう。

子供っぽいわたしの夢に、自ら引導を渡したのか、それともやはりわたしの夢は、周囲の圧力に負けて潰されただけなのか。

それをこれから考えたいと思う。

最後になったが、ヴォルテールの完全なる名言に、若輩の身で不遜ながら、ひとつだけ注意書きを添えておこう。

人は、死んだら何も守れない。

1 美少年探偵団のこと

美少年探偵団といういかかわしい名称の団体が、わたしの在学する私立指輪学園中等部において、なにやら秘密裏に活動しているらしいことは、そりゃあぼんやりとは知っていたけれども、幸運にもこれまで、わたしはそんな怪しげな連中に関わることなく、学校生活を送っていた。

校内のトラブル全般を解決する、非公式非公開非営利の自治組織を謳っているものの、しかしその実、校内のトラブルの、ほとんどすべての元凶であると言われる彼らは、事実上、全校生徒からの鼻つまみ者だ（一部支持者を除く）。

もともと、『大雀蜂事件』や『増殖教室事件』など、美少年探偵団に関してはさまざまな噂がまことしやかに語られているだけで、その実体は杳として知れない。具体的な活動内容どころか、その構成メンバーさえあやふやなのだ。

誰もが好き勝手に言うものの、それらは全部、『友達の友達』から聞いた都市伝説みたいなものであり、いざ実際に、直接彼らと関わった生徒の話を聞こうとすると、皆一様に口をつぐむ。じかにメンバーと会っているであろう、肝心の依頼人でさえ、何も語ろうとしないのだ。

なんでも、守秘義務がある——とか。

いやいやいやいや。

不覚にも笑ってしまいそうになる。依頼人のほうに守秘義務が課される探偵団とは、一体全体、何体なのだ。正体不明過ぎる。結局、そのあたりが彼らの怪しさを増大させているとも言えるのだが、いよいよわたしの幸運も尽き、いざ不幸にも彼らと関わってしまったとみると、なるほど、無言を貫く依頼人達の気持ちもわかるうというものだった。

馬鹿馬鹿しくて、話したくもない。

現実味も真実味もない話をして、嘘つきと思われるのは誰だつてごめんだ——だけとわたしは、虚言癖を疑われるのを覚悟の上で、彼らのことを語ろうと思う。彼らにまつわる心ない、あらぬ誤解を解きたいから——なんて、殊勝な理由ではない。誹謗中傷にも似たあれらの噂が、それでもぜんぜん足りていないという確固たる事実を、広く世に示したいからこそ、告発の意味を込めて、語ろうと思う。わたしの場合は、現状、既にその守秘義務からは解放されているから、おおっぴらに語れる。

美少年探偵団。

あの愚かしくも美しい、そして美しい、五人の美少年について。

2 四人の長ともうひとり

連れて来られたのは美術室だった。



続きは本編で！